

## 自己評価報告書(最終報告)

コース等名

言語系コース(英語)

記載責任者

前田 一平

## ■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

## I. 学長の定める重点目標

## I-1. 教員養成の質保証

大学の機能別分化・機能強化が求められる中、本学は教員養成大学として高度専門職業人としての教員を養成することを目標としている。教員養成の質保証のため、専攻・コースではどのような取り組みを行うか、具体的な方策を示してほしい。

## 1. 目標・計画

○本年度に開設した授業「小学校英語教育論」に関して、本授業が教育実習を行うための、また卒業後、教員として「外国語活動」を担当するための準備となるべく、実施内容を検討し充実させる。  
○全学の学部新入生および第2学年の全員に「英語能力判定テスト」(日本英語検定協会)を実施し、入学時と1年後の英語力を比較検討し、今後の本学における英語教育の改善に資する。  
○本年度中に地域連携センターのLL教室にCALLが設置されることに鑑み、これを全学の英語教育に活用すべく利用方法を検討する。

## 2. 点検・評価

○「小学校英語教育論」は授業内容を確認し、担当者を決定し、担当者間で連携を図り、目標どおり授業を実施した。学生の関心の高さを反映して受講希望者が多く、二つのクラスを開講して対応した。教育実習を含め「外国語活動」担当の準備に資する授業となったと確信している。  
○学長裁量経費「プロジェクト経費」に採択され、「英語能力判定テスト」を全学1年次および2年次生を対象に実施した。授業「英語コミュニケーション」のクラス分けに利用し、加えて、昨年度実施の同テスト結果との比較検討を行った。  
○予定どおりCALLが設置され、全学対象の説明会を実施した。使用方法、利用効果を確認し、次年度に向けて利用予定を検討した。

## II. 分野別

## II-1. 教育・学生生活支援

## 1. 目標・計画

○TOEIC IPテストを実施する。  
○海外留学のための情報提供ならびに学習支援を行う。  
○学部学生用の学習室(俗称、E-ポケット)を充実させ、自主学習の環境を整える。  
○英語資格試験の情報を学生に周知する。  
○留学生のための学習・生活支援を行う。  
○ゼミ単位で採用試験を意識した個別指導を行う。  
○全学の学生に対して全学開講の授業「英語コミュニケーション」は予算と人事が許す限りネイティブ・スピーカーが担当することとし、本学学生の英語運用能力を高めるべく、授業改善を図る。  
○同「英語リーディング」はTOEIC対策とし、教員採用試験や他の就職試験に役立てる。

## 2. 点検・評価

○英語コースの学生全員にTOEIC IPテストを実施した。その結果を確認し、過去の成績と比較検討し、以後の指導に利用した。  
○学生に留学情報を常に提供し、留学を促した。本年度はオーストラリアへ日本語指導助手として1名を派遣した。  
○E-ポケットを整理して環境を整えた。それによってスペースが拡張し、利用率が上がった。新規に英語学習雑誌を補充し、授業用ビデオを学生の閲覧に供した。  
○コースの掲示板等を利用してTOEIC、英検、TOEFLなどの情報を提供した。  
○本年は2名の正規大学院留学生、2名の教員研修留学生が在籍し、指導教員を中心に学習・生活支援を行った。  
○学生の教員採用試験に関しては、ゼミで個別に指導・助言をした。  
○「英語コミュニケーション」は本年度もすべてネイティブによる授業を実施し、本学学生の英語運用能力の向上に役立てた。  
○「英語リーディング」では本年度もTOEIC対策の授業を実施し、教員採用試験等、就職活動に役立つ指導をした。

## Ⅱ-2. 研究

### 1. 目標・計画

- 教員各自が自己の研究を遂行できるように、教員間で協力体制をとる。
- 英語教育上必要と考えられる研究テーマを設定し、教員相互に協力して共同研究を進める。
- 学部入学前期・後期試験の内容・実施方法に関しての見直しを行い、変更の可能性を探る。
- 科学研究費補助金の申請を積極的に行う。
- 小学校「外国語活動」の必修化に対応する授業「小学校英語教育論」を運営し改善を図る。

### 2. 点検・評価

- コース教員の海外出張(6名、通算10回)に際して、出張中の職務に関して教員間で協力体制をとった。
- 本年度は公開講座3講座、教員免許状更新講習3講習を実施し、コース教員間で教育研究上の連携を図った。全学学部生の英語力を比較調査するべく学長裁量経費を申請して、コース教員全員で英語能力判定テストの実施にあたった。「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」における教科内容学研究に関わり、「小学校英語教育論」の教科内容について英語コースの各分野から提案し作成にあたった。
- 前期・後期とも倍率が2割を超えていたこともあり、入試の内容・実施方法に関しては現状を維持することとした。
- 本年度は継続分を含めて本コース教員4名が交付を受けた。
- 「小学校英語教育論」については、先に述べたように、コース全体で準備運営し、無事、実施できた。

## Ⅱ-3. 大学運営

### 1. 目標・計画

- 教員各自が担当する各種委員会などの職務を真摯に遂行し、大学運営に積極的に関与する。
- 本コースの性格に鑑み、国際交流を支援し、特にコースに関係する分野において積極的に参加し協力する。

### 2. 点検・評価

- 教員各自が各種委員会などの職務を真摯に遂行し、大学運営に積極的に尽力した。
- フィンランドからの客員研究員1名と国際学術研究員1名が6月末まで滞在した。また、鳴門教育大学英語教育学会の年次大会において、フォーラム「Parallel Issues in English Education in Indonesia, Mexico, and Korea」(インドネシア、メキシコおよび韓国における英語教育比較)を実施した。発表者は留学生のFiry Kustantin (Indonesia), Hilda Alfaro Flores (Mexico), Moon Yuna (Korea)、司会者は本学准教授ジェラード・マーシェンであった。

## Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

### 1. 目標・計画

- 附属学校との連携については、授業での取組を中心に、附属学校への協力を図る。
- 公開講座、教員免許更新講習及び教育支援講師派遣を積極的に実施し、地域との連携を強化する。
- 海外の研究教育機関との共同研究・事業を推進する。

### 2. 点検・評価

- 附属小学校および中学校と連携して大学院の授業「教育実践フィールド研究」を展開した。また、推進授業や研究発表会および学生の実習においてコース教員が指導・助言にあたった。また、附属中学校の「総合的な学習の時間」において、授業協力をした。
- 公開講座3講座、教員免許状更新講習3講習を実施した。また、教育支援講師等として4回の派遣の実績があり、その他、教員研修講座等を通して地域との連携を図った。
- フィンランドからの客員研究員1名、国際学術研究員1名が6月末まで滞在した。
- 国際交流として、オーストラリアへ日本語指導助手の派遣を継続した。また、ウェスタン・カロライナ大学の学生3名、教員1名が来学した折には、英語コース学生との交流会をもった。

## Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

懸案であった「小学校英語教育論」の授業を実施し、多くの受講生を得て軌道に乗せた。これは学校現場と学内の教育上の必要性に応えるという意味で、本学に貢献するコース運営として特筆に値するものと判断する。